

AMDA

多様性の共存

ジャーナル

2016 年 7 月 25 日 VOL.39 第 278 号 定価 550 円
 発行 / AMDA 〒700-0013 岡山市北区伊福町 3-31-1
 TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717
 E-mail: member@amda.or.jp
 郵便振替: 01250-2-40709 □口座名: 特定非営利活動法人アムダ

2016 年
夏号

夏

救える命があればどこへでも

熊本地震支援活動から南海トラフ地震・津波への教訓

AMDA グループ代表 菅波 茂

認定 特定非営利活動法人アムダ (AMDA)
<http://amda.or.jp/>
 認定 特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
<http://www.amda-minds.org/>
 特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
<http://amda-imic.com/>
 AMDA 兵庫
http://www.amdainternational.com/amda_hyogo/

「地震に必ず襲われる」「地震は発生するかもしれない」。この両者の考え方には決定的な違いがあります。地震に必ず襲われると思えば準備をするからです。電気と水・食料に加えて寝る場所がない。まさに文明・文化生活の否定です。経験者のみが理解できる世界です。

熊本地震支援活動は「地震は発生するかもしれない」から始まりました。AMDA にとって予想外、準備なし。ただし、日頃から構築していた医療、介護、災害鍼灸などの医療ネットワークの作動によって、少しでも被災者のお役に立てられたことに感謝しています。それでも、あすすれば良かった。こうすれば良かった。胸中に去来することが

たくさんあるのも事実です。被災者の方々の生活が少しでも早く再建されることを心からお祈りいたします。

近い将来、南海トラフ地震・津波に必ず襲われます。33 万人の死者と膨大な数の被災者が予測されています。被災地と予想されている人たちは個人レベルでどの程度の準備を進めているのでしょうか。一方で、医療機関は被災地へ医療チームを派遣する準備をしているのでしょうか。電気と水・食料に加えて寝る場所がない被災地へ派遣された医療チームはどうなるのでしょうか。医療活動の命である医薬品や衛生材料は品切れにならないのでしょうか。ここから先は想像力の問題です。

「AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム」は最大レベルの被害が予想されている四国の高知県と徳島県の避難所医療を想定し、両県及び基礎自治体との協定に基づき 10 カ所の避難所医療活動の準備を進めています。ポイントは事前準備です。食料、水、医薬品及び衛生材

料の 2 週間分を派遣医療チームの宿舎に蓄える予定です。緊急時活動資金については阿波銀行、高知銀行そして中国銀行と緊急時借入枠の契約を結んでいます。人の命は医療だけではなく生活関連物資がなければ保てません。岡山経済同友会との協定に基づいての企業のご支援をお願いしています。ロータリークラブなどの団体も強力なパートナーです。

被災地医療支援は国内の支援体制の限界を超える可能性があります。海外支援ネットワークの構築が不可欠です。台湾、韓国そしてシンにガポールに補給ルートを設定しています。この 3 カ国を基礎にして世界からの支援を受け入れる体制づくりも進めています。

南海トラフの発生率は 2016 年度に 80%、2017 年度に 90%、2018 年度に 100% の予想で準備を急いでいます。被害妄想に終われば幸いです。

皆様方のご理解とご支援をいただければ望外の喜びです。

益城町立広安小学校 田中 元校長先生からの手紙

AMDA の思い子どもに継承

熊本県益城町立広安小学校長 田中 元

難波妙さん(益城町出身)をはじめ AMDA の皆さんが広安小学校に到着し、具体的な活動を始められたのは 4 月 14 日の前震後すぐであり、この熊本で本震を体験された方もいる。到着後すぐに応急医療体制が構築され、医師や看護師らも次々に増員され、24 時間の対応が可能になった。

被災者の皆さんは「何かあれば、いつでも見てもらえる」という安心感とともに、健康面や生活の不安など何でも相談できたことが大きな心の支えとなっていた。本校職員の健康面まで気遣っていただいた。心身共に助けられた職員も多かった。

避難所運営が本格化してから、様々な公的・私的な医療関係者が避難所を訪れるようになった。役場職員や私たち教職員はどう接し、どこまで支援をお願いしていいのか、さっぱり分からなかった。

何か依頼があると「AMDA さんを通してください」という応答を何度も言った。その都度、支援の組織や内容を的確に見極め、判断していただいた。ボランティアや支援物資搬入の対応に忙殺されていた私たちにとっては、何よりもありがたかった。

避難所の運営などの経験も皆無だった。そんな中で、AMDA の皆さんには積極的に避難所の衛生環境等の状況を報告し、施設面の改善や感染症が発生した場合の隔離場所の設定、仮設トイレ等の具体的な清掃計画、エコノミー症候群の防止に向けた講話や指導など、幅広い提案と行動をしてもらった。さらに、特に 5 月 8 日までは水道が復旧しなかったため、衛生面での配慮は念入りに行っていた。水を必要としない簡易トイレ「ラップポン」の設置など、私たちはその存在すら知らなかった。

AMDA の撤退が発表されると、多くの被災者が残念がった。だが、これまでの



田中校長先生(中央)

功績に心から感謝していた。撤退にあたっては、医務室を保健室に戻すことや、体育館内に新たな医療拠点を移し、地元の鍼灸師による治療体制を確立するなど、後に残る被災者のことを第一に考え、最後の最後まで活動されていた。頭が下がる思いでいっぱいだった。

「これからは地元の医療・福祉スタッフに受け継いでほしい」との AMDA の皆さんの思いの根底には、「益城町が好きだからこそ、益城町の人たち自らの力で、いつの日か復興を成し遂げてもらいたい」との強い思いを感じる。AMDA の皆さんからいただいた力と思いは、これから未来を担う広安小学校の子どもたちに伝えていきたい。(AMDA に届いた手紙の要旨)

4月14日夜、熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード6.5の地震（前震）が発生、続いて28時間後の16日未明、前震とほぼ同じ場所を震源とする本震（マグニチュード7.3）に襲われました。あの日から約3カ月が経過。仮設住宅への入居が始まりましたが、崩壊した自宅やビルは手つかずの状態。被災者は依然、不安な日々を送っています。全国から支援金や励ましの声が続々と届いていますが、“古里”が活気を取り戻すには長い時間がかかりそうです。AMDAや自治体、ボランティアの取り組みを振り返るとともに、現地に出向いた人たちから被災地の状況や活動内容、感想を聞きました。

好評の鍼治療



鍼治療を行う吉井鍼灸師

AMDAは長引く避難所生活による体の痛みから鍼治療の需要が高まっているため、4月25日から鍼治療を始め、現在は地元鍼灸師チームを中心に活動を続けています。

地元の吉井治鍼灸師は、自らも避難所生活を送りながら、同じ避難所生活を送る方へマッサージなどのボランティア活動をしていました。今回、AMDAとともに活動を行うことになり、鍼治療を受けた被災者は「体が楽になった」「肩こりや頭痛の症状が薄れた」と笑顔が見られました。鍼治療を受ける人は連日20人を超す人気ぶり。5月2日には「不眠となった小学6年男児に小児鍼をしたところ、よく眠れるようになった」と喜びの声がAMDA本部に届きました。

鍼治療を受けた人は6月30日までで延べ1,216人。AMDAは広安小学校にいる避難者が各自の帰宅先が見つかるまで鍼治療を継続する予定です。

地元鍼灸師チーム

鍼灸師 吉井 治（熊本県在住）

地震が起こるまでごく普通の生活を送っていましたが、あの日を境に突然、生活が一変しました。派遣には臨床第一線の先生方が参加され、災害時における鍼灸治療の可能性を新たに知る機会となりました。一方で、仕事や家の片づけなどと平行しながらの活動は精神的に辛い時期もありましたが、皆様から多大なるサポート受け、現在まで活動を継続することができました。地震を通じてAMDAに出会い、沢山のことを学んだことは貴重な経験となりました。被災地に安穏な日に戻るまで地元の先生方と共に頑張っていきたいと思っています。

第11次、17次医療派遣チーム

帝京平成大学教授

鍼灸師 今井 賢治（東京都在住）

被災者の医療ニーズは、時間の経過とともにキュア（cure）からケア（care）に変化していきます。様々な慢性疼痛やストレスが出現し、そのマネジメントを鍼灸治療は得意としています。熊本・広安小学校での活動でもAMDAは急性期から亜急性期にかけて鍼治療の導入を行い、現在の慢性期に至っても鍼灸師チームが活動を継続し、貢献されていることは嬉しい限りです。相互扶助、現地主義、多様性の共存の3原則を基本とするAMDAの精神を大切にし、鍼灸業界の災害時連携ネットワークの構築を推進していきます。

学生ボランティアが活躍

AMDAと連携協定を結ぶ岡山経済同友会は5月3～5日、岡山県内の大学生らによるボランティアを、被害が大きかった熊本県益城町に派遣。広安小学校の授業再開に向けた作業に加わりました。共催は大学コンソーシアム岡山で、12大学・短大から募集してボランティアバス1台を運行。学生25人（女性13人、男性12人）が参加しました。連日、午前9時半から夕方まで、ほうきやモップ、ぞうきんを使って各教室を清掃、グラウンド整備に汗を流しました。学生の献身的な取り組みに、教師らは何度もお礼を述べていました。

学生たちは「少しでも良い環境で過ごしてもらいたい」「余震の怖さが続く中、子どもたちの明るい声が聞こえるだけで元気になった」「今後も被災者のために何ができるか考え続けたい」と話していました。



体育館清掃に励む学生ボランティア

被災者に笑顔

足湯

4月25日、避難所の広安小学校で足湯マッサージを実施しました。熊本県山鹿市役所と水辺プラザ「かもと」様の協力によるものです。午後5時から2回行い、50人以上が訪れる大盛況でした。被災者は「震災後、初めて湯に足をつけた」「今夜はゆっくり眠れる」と喜びの声が聞かれました。



足湯マッサージを受け笑顔を見せる女の子

第1次、15次医療派遣チーム

医師 佐藤 拓史（福岡県在住）

医療スタッフの第1次派遣で、4月15日午後10時頃に益城町の広安小学校避難所に到着し、そのまま医療活動を開始。ライフラインストップの中で24時間体制の診療となりました。余震の続く暗闇の中での避難所は不安と恐怖に耐えながらも益城町の方々、小学校の先生方、自衛隊、AMDAみんなで協力して声を掛け合い、寄り添ってお互いを気遣いながらの活動でした。今後の災害医療に今回の経験を活かす使命を感じています、一医師としてはこの経験がかけがえない宝物になっていることは確かです。益城町の力強い復興を心から願っています。

第4次医療派遣チーム

救命救急士 篠原 隆史（徳島県在住）

医療チームの食事の確保や巡回診療への同行などを実施。できるだけ避難所で寝泊まりし、皆さんを余震から守ることを最優先にしました。派遣された医師や看護師、薬剤師、鍼灸師の技術水準は高く、ボランティア学生も自らが被災者でありながら、笑顔で避難者に接している姿に感動しました。総社市派遣の電気自動車2台は東日本大震災時の導入車輛で、今回も大活躍でした。現在は南海トラフ地震に備え、電気自動車の充電場所や料金の支払い方法などを調査しています。

こいのぼり



大きな鯉のぼりに子どもたちは大喜び

「上を向いて元気に泳いで」。熊本県益城町の避難所2カ所に5月2日、東日本大震災で被害を受けた宮城県石巻市雄勝町にある雄勝歯科の河瀬総一郎歯科医と有志たちによって大小9匹のこいのぼりが届きました。こいのぼりは、東日本大震災復興のシンボルとして石巻市雄勝町の中心地に掲げられていたものです。

こいのぼりが届いたのは、広安小学校とテント村（益城町総合運動公園）です。AMDAのメンバー、大政朋子が東日本大震災時に活動したご縁で贈られました。避難生活を送る子どもたちは、こいのぼりを手に広場を走り回ったり、校舎に掲示するなど大喜びでした。

音楽会



避難所である体育館で行われた音楽会

広安小学校の体育館で5月11日、避難者とAMDA支援スタッフによる合同演奏会が開かれました。鍼治療を受けて症状が改善した避難者が「スタッフへのお礼に」とケーナ（縦笛）をプレゼントしたのがきっかけです。

当日はケーナとギターで「あの素晴らしい愛をもう一度」などを演奏、避難者と鍼灸師や看護師が合唱しました。避難所となっている体育館は、穏やかな雰囲気になりました。参加者は「久しぶりに楽しい時間が過ごせた」「明日から頑張ろうという気持ちわいた」と笑顔を見せていました。音楽会はその後もたびたび催されました。

第12次医療派遣チーム

医療法人芳越会ホウエツ病院
看護部長 徳丸 千里（徳島県在住）

被災地での支援は初めてでしたが、同僚からの情報や日々更新されるAMDA速報により、不安なく現地に赴くことができました。感銘を受けたのは、私たちが時間をかけて取り組んできたチーム医療がAMDAでは即座に出来上がることでした。被災者の方々を気遣った部屋の割り振りやイベント（足浴など）、健康管理の巡回、栄養管理や感染対策。そして避難所縮小のための転出先検討など状況に応じた対応の素早さは、AMDAならではの調整力とコネクション力なのだと実感しました。この経験を生かし、南海トラフ地震に備えた取り組みを強化していきたいと思います。

第12次医療派遣チーム

岡山大学救急薬学教室
薬剤師 名倉 弘哲（岡山県在住）

今回の医療チームでは共に活動したメンバーに恵まれ、相談できる仲間が多かったこと、そして被災地で長期にわたるロジスティック機能を担っていただいたAMDA事務局の尽力があったことがスムーズな活動ができた最大の理由です。携帯電話が使用できたことで良好なコミュニケーションもとれました。しかし、南海トラフ地震が発生した場合、東日本大震災同様に限られた通信手段でどのように連絡をとっていくのか、十分な対策が必要ではないでしょうか。医療資源を有効に利用するため避難所での医療ニーズを重点的に調査する必要もあるのではないかと感じました。

第8次、24次医療派遣チーム

介護福祉士 森 由紀子（岡山県在住）

活動は要介護者の身の回りの世話でした。食事はどんぶり物や肉などが多く、お年寄りはとても食べにくそうでお粥に変更していただいたり、補助食品を看護師と選び提供しました。トイレは「簡易式箱型（ラップオン）」を使用しました。これは本当に画期的で、このトイレを使うことで感染を防げたと思います。特に2週間ぶりに入浴出来た時のみなさんの笑顔は忘れられません。活動を通じ、介護職はさまざまな方との橋渡しの役割があり、被災地支援には欠かせない職種だとしみじみと感じました。

熊本地震を体験して

特別養護老人ホーム
「シルバーピアさくら樹」（熊本市）
訪問介護事業所 所長 大内 麻由美

本震の時の様子を6年生の娘が綴っている。「地震こわい、大内家はみんな大丈夫です、みなさん、気をつけてください、絶対死なないでください」。この時まさに、死という恐怖に誰もが直面した瞬間だったと思う。前震から10日後の4月24日、初めてAMDA理事の難波妙さんに出会った。当施設を福祉避難所として運営するために難波さんに相談するといち早く、とても快くボランティアの手配をしていただいた。

AMDAのボランティアの方は皆、志が高くAMDAの理念を十分理解し、「困った時はお互い様」の信念を強くもっておられた。施設では行き届かなかった介護の部分にすぐに手を差し伸べてもらい、被災者の心の声にもいち早く気づいてくれた。「地震は悪いことばかりではない、地震がなければAMDAの皆さんに出会うこともなかった、地震で負った心の傷を癒していただき、大変感謝している」という、さくら樹の福祉避難所をはじめ、皆さんの御礼の言葉をこの場をかりて代弁させていただきたい。AMDAの軌跡とボランティアの理念、熱い思いをしっかりと受け継ぎたい。

※「シルバーピアさくら樹」様は、要介護避難者に対し入浴支援を共に行った経緯があり、AMDAは介護福祉士の派遣を行っていました。

第9次医療派遣チーム

医療法人 芳越会 ホウエツ病院
理学療法士 大江 昭典（徳島県在住）

災害支援での参加は初めてで、不安と緊張で現地に入りましたが、スタッフや被災者の方が温かく受け入れて下さり、微力ながら精一杯活動する事ができました。

主な活動は、被災者の治療順位や環境設定が必要な方などを抽出した後、対応策を検討し、実行することでした。特に段ボールベッドが非常に有効で、環境を整えることで活動性の向上が見られ、転倒などのリスクも大幅に減らすことができました。今回の活動で災害支援におけるリハビリスタッフの有効性や必要性を感じて頂ければ幸いです。

連載インタビュー「支える喜び」シリーズ 第9回 ハウエツ病院長 林 秀樹様

AMDA を支えてくださっている支援者の皆様に、インタビュー形式でエピソードをお伺いしている「支える喜び」シリーズ。第9回目となる今回は徳島県美馬市のハウエツ病院長で、熊本地震など大規模災害の被災地支援で医療スタッフを次々と派遣されている林秀樹様に話をお伺いしました。

救急救命、地域医療にまい進

AMDA お忙しいところありがとうございます。今回の熊本地震でもハウエツ病院の方々のご活躍は素晴らしく、職員一同感銘を受けています。

林 とんでもない。そう仰って頂けてとても嬉しいです。

AMDA そもそも先生が救急救命医療のためにヘリポートを作り、地域医療に熱心に取り組むことになったきっかけを教えてください。

林 ハウエツ病院のある徳島県美馬市には自治体病院がなく、当院が2次病院を任されています。当方の様に過疎化の激しい田舎において小規模民間で2次病院に取り組んでいくのは、人的・経営的にとても大変です。

ハウエツ病院の前身は、父が昭和23年に築いた林病院です。私は徳島大学旧第3内科勤務を経て昭和60年頃から本格的に林病院に携わるようになりました。

当時はMRIなどの検査機器がそろっている医療機関は当地域になく、病状の進行した患者さんはかかりつけ医から遠方の基幹病院に紹介されていました。父とともに地域の利便性を考え、内視鏡やCT・MR等の医療機器をそろえ、悪性疾患の発見に取り組みました。

検査体制が整うと救急車受入れも増え、2次病院を要請されました。そこで救急車が来るまでに状況に即した準備が整えられるよう、現場の消防と専門ホットラインを作りました。当時ホットラインは大学病院など基幹病院にもありましたが、24時間誰かが必ず電話に出る体制は未だありませんでした。

AMDA 何年くらい前の話ですか？



林秀樹先生（左から2番目）ハウエツ病院ヘリポートにて



林秀樹先生（右）AMDA事務所前にて

林 ハウエツ病院ができてからなので、20年前の話です。2000年には介護保険が始まり高齢者が多い当地域では殆どの医療機関が慢性期医療に取り組み、多忙で経費のかかる急性期をする病院が殆ど無くなってしまいました。検査機器や初期医療体制を充実して救急車の受け入れを良くするために、平成8年5月1日に現在のハウエツ病院に新築移転しました。

病院救急室前にヘリポート

AMDA ハウエツ病院の周りの交通環境は本当にいいですね。

林 この地域周辺には心肺停止など重症の方を常に受け入れる医療機関は無く、当初、救命士の皆さんは救命率を上げるために消防庁から二つ課題を与えられていました。

一つは現場に行ったとき適切な状態を把握が出来、必要があればヘリを呼べることです。二つ目はワークステーションで、病院に救急隊や救急車が滞在し、重症が予想される場合は医師も一緒に現場へ出かける体制です。

ハウエツ病院が救命士と一緒に取り組める事として先ずは平成14年12月に病院の駐車場の一角にヘリポートをつくりました。

AMDA すばらしいですね。

林 徳島県で病院敷地内にヘリポートをつくったのはハウエツ病院が最初です。当時から過疎が進んでおり医師・看護師を充実させる事が難しく、当院のみであらゆる重症者に対応することは困難で、いち早く適切な医療機関へ運ぶことが必要となりました。ドクターヘリが開始後、

現場での稼働率は常に県内1,2位で年間70～80件です。

AMDA なくてはならない病院であることがよく分かります。

林 地域と連携を取ってやってきた結果で、やっぱり地域のために活動する気持ちが大切だと思います。医者になって色々な方に助けられ、父とともに地域の利便性を考えると、連携を組むことで改善されることが沢山ある事を知りました。

先駆的な多職種連携に取り組む

AMDA 地域医療はこういうものなのだと思われたのは、いろいろな時代の要請とか仕組みからで、徐々に今のような機能になってこられたと伺いましたが、先生の矜持を教えてください。

林 都会、田舎に拘らずご本人にとって必要な医療や介護があります。資源不足な部門は各々の専門職種以外にも、このぐらいだったらできるという網目を広げ、なるべく漏れが無いように地域で支え合う。また交通機関が乏しく高齢者は来院するだけで大変なため、医療法人芳越会としては、急性期医療だけではなく慢性期医療、在宅など介護分野や居宅に関する事もやっています。それでも地域全体で暮らしやすくするには、当法人以外にも密な連携を組み、色々な分野で効率の良い取り組みをしないと、利用される方にとって本当のメリットにはなりません。多職種連携は地域全体から発信されるべきだと思います。

AMDA それはまさに日本の進むべき方向の最先端で、先生のいらっしゃる地域都会より早くに少子高齢化から超高齢化社会になっているところから、より深刻に感じてこられたということですね。多職種連携とか、いくつもヒントになる部分を先駆的に取り組んでこられたのが、ハウエツグループだと思います。

林 皆さんチームで行って来ました。私ひとりだけの力ではありません。

AMDA そういうスタンスで何事も実践されているのが、成功の秘訣のような気がします。AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム運営委員会の委員長も引き受けてくださって、今すぐお忙しいところだと思います。先生の進め方のスタイルを教えてください。

林 みんな友だちにしちゃいます。facebookなどSNSも利用し情報の発信、共有もしていますよ。

AMDA 熊本地震が起こって、いよいよ西日本で何かが起きるのではないかと気がしてきます。今後もますますの活躍をお願いしたいと思います。

（インタビューでの敬称は省略させていただきました）

スリランカ洪水・地滑り災害緊急支援

5月半ばにスリランカ全土を覆った低気圧が発生。主要な河川の水位が上昇し、特にコロンボなど西部・中部の各地で洪水や地滑りが起きました。5月末までの死者数は100人を超え、行方不明者も依然として多く、当局は被災者が全国で約25万人に上るとしています。

AMDAは2002年以來スリランカで活動しています。

児童に通学カバンを寄付

6月2日にAMDA本部は調整員がコロンボ入りし、スリランカ支部に合流。支援の一段階として、スリランカ支部とSt. John Ambulance、ライオンズクラブ・ネガンボ支部が中心となって、被災地域にある学校に寄付などを行いました。コロンボから約20キロ離れたマルワナの小学校では、1年から5年まで136人が通っており、AMDAは全校児童に通学カバンを寄付しました。子供たちはカラフルなカバンを見せ合うなど大喜びの様子でした。



児童に通学カバンを贈呈する

劣悪な環境の中で無料診療

第二段階として、AMDAはスリランカ支部、同国保健省と協力して、コロンボ郊外のコロナワ村で無料診療を行いました。現地にある仏教寺院のご住職によると、被災時の生活状況は劣悪で、外部からの支援はほとんど入ってこなかったといえます。今回、立正佼成会一食平和基金との合同事業により、現地のニーズに合わせた迅速な支援が実現しました。



無料診療を行う菅波代表(右)

無料診療は6月20日に行われました。AMDAグループの菅波茂代表をはじめ、スリランカ支部長とそのスタッフ、地元の公衆衛生監視員3人、医師4人、コロナワ村の保健局から薬剤師兼看護師2人からなるチームに加えて、会場となった地元の仏教寺院からボランティア数人が参加しました。この日、診察に訪れたのは320人(子ども58人を含む)で、内訳は女性が218人、男性が102人でした。主な疾患はかぜ、皮膚疾患、ぜんそく、寄生虫、尿路感染症、高血圧、嘔吐、上気道感染症、外傷などで、一部の子供達には下痢と胃腸感染症が見られました。



蚊帳を贈呈する菅波代表(左)

デング熱防止へ蚊帳配布

災害発生から1カ月以上が経過した現在も、村内では瓦礫が残っており、水が引いていない箇所も目につきました。蚊の発生やデング熱の状況、ならびに地元の公衆衛生監視員の助言もあり、AMDAは蚊帳を配布することを決定。菅波代表が約70組をコロナワ村の人達に渡し、別途100組をウェランピティヤで被災した人々に配りました。地元の学校や医療機関、地域の女性リーダー達に救急箱20個も配布しました。その際、公衆衛生監視員が学校や女性リーダー達に応急処置のトレーニングをしました。

今回の緊急救援活動には、立正佼成会一食平和基金のご支援をいただきました。無料診療の会場となった仏教寺院のご住職は今回の支援に謝意を表し、菅波代表も一同を代表して寺院の方々、当局関係者に謝辞を述べました。

■ AMDAからの派遣/菅波 茂 医師
ニティアン・ヴィーラヴァーグ 調整員

AMDA フードプログラム

野土路農場 園児がアヒルを放つ

AMDAは新庄村の野土路農場で、有機無農薬による稲作に取り組んでいます。5月23日には地元の保育園児が害虫駆除に役立つアヒルのひなを放しました。

田植えが済んだ水田(約10%)で、村保育所の2~6歳児26人が参加。アヒルが稲に付く害虫を食べることを教わった後、「早く大きくなってね」と声をかけながら、生後3日ほどの約60羽を次々と入れました。ひなは元気に水田を泳ぎ回っていました。周囲にネットを張り、8月下旬まで放し飼いされます。

農場はアジアへの有機農業普及を目指



アヒルの放鳥をする子どもたち

すAMDAが、新庄村と連携して2011年から運営しています。10月の収穫祭では式典の後に交流会を行い、野土路ダックを使ったフィリピン風スープやバーベキューを食べながら歌と踊りをにぎやかに繰り広げます。

マリノ村での活動

AMDAはインドネシアのマリノ村バトゥラシピ地区でも、有機農業普及プロジェクトに取り組んでいます。



同地区は高地で棚田が多く、換金作物としてトマトを作っていますが、農薬をたくさん使うため農家の健康も心配されています。

そこでAMDAは2013年にマリノ村から研修生2人を野土路農場(新庄村)に招きました。2人は帰国後、有機農場の実践圃場を開所。その後、AMDA職員が計5回、マリノ村に赴き、フォローアップを継続しています。

マリノでは有機農業に取り組む農家が少しずつ増えつつあります。この運動の広がりには生活向上だけでなく、インドネシアの自然環境を守ることもつながると期待されています。

↑マリノ農場のスタッフと農地の測量を行うAMDA職員

AMDA 鎌倉クラブからのお知らせ◇東日本大震災復興支援

AMDA 鎌倉クラブ主催の「第6回 絃侖会等曲演奏会」が開催されます。皆様のご来場をお待ちしております。入場無料です。

日時:平成28年9月25日(日)14:00開演(13:30開場)

場所:鎌倉生涯学習センターホール

主催:鎌倉絃侖会 協力:AMDA 鎌倉クラブ 後援:鎌倉市・鎌倉朝日新聞社

お問合せ:AMDA 鎌倉クラブ Tel 090-4619-8701 Fax 0467-24-2969

E-mail nezur@com.zaq.ne.jp

第3回 南海トラフ災害対応プラットフォーム調整会議を開催



出席者全体写真

7月9日、AMDAは南海トラフ災害に備えた第3回調整会議を岡山国際交流センターで開き、参加した自治体や医療関係者、財界代表ら約270人が具体的な対応策を協議しました。

議長団は総社市の片岡聡一市長、丸亀市の梶正治市長、AMDAグループの

菅波茂代表が務めました。

福島県相馬市長で医師の立谷秀清氏が東日本大震災の現状と対応についての基調講演から始まり、出席した台湾と韓国、シンガポールの代表が「南海トラフ災害に積極的に支援したい」と決意を表明しました。その後、菅波代表は「AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム」の進捗状況について、派遣場所や輸送ルートなどを詳細に説明。「食糧や医薬品、宿泊所などの事前準備と現地との事前交流がポイントになる」と訴えました。

出席者は、南海トラフ災害の対応が緊急を迫られている状況に緊張感を抱きながらメモを取るなど熱心に聞き入っていました。

第3回災害鍼灸チーム育成プログラムも同時開催!

7月8、9日 AMDA は災害鍼灸チームの養成講座を開き、全国各地から29人が参加。AMDA グループ代表菅波を始め、東日本大震災や熊本地震で活躍した今井鍼灸師や高橋徳先生、AMDA 大槌健康サポートセンターの佐々木賀奈子鍼灸師が講義をしました。菅波代表は、「鍼灸師の方々は被災者の体をさすり、会話をすることで不安を取り除き、体の内側の力を揺り動かす大きなパワーを持っている」と話しました。参加者の皆さまは熱心に耳を傾けていました。

AMDA スリランカ紛争復興支援

和平構築プログラムに AMDA 中高生会メンバーが参加します!

スリランカでは1983年から26年間にわたる内戦(主にシンハラとタミル間)がありました。AMDAは停戦中の2003年から3年間、医療和平プロジェクトを実施し、民族や宗教が違う3カ所で平等に医療と保健教育を行いました。この3カ所はキリノッチ(ヒンズー教徒が多数)、ハンバントタ(仏教徒が多数)、トリンコマリー(ムスリムが多数)です。2009年の終戦後、AMDAはスリランカ紛争復興支援として、医療活動に加えてスリランカの中学生達にスポーツや文化、宗教の交流を通じて和平構築プログラムを開始しました。開始当初はコロポで開催し、その後、停戦中、AMDA 医療和平プロジェクトを行った地域を中心に毎年3カ所を順に訪問し、相互理解を深め、今後の平和に繋げるプログラムを実施しています。

AMDA 中学高校生会は昨年度キリノッチでのプログラムに参加しました。今年度は7月29日～31日にトリンコマリーで計画されており、メンバー2人が参加する予定です。AMDA 中学高校生会は現地の中学生たちと宗教や民族間の対話ならびに交流を深めていきたいと考えています。同世代の日本の学生が加わることでより盛り上がり、スリランカの学生達の緩衝材にもなることを期待しています。



去年キノリッチで行われたバレーボール大会

AMDAと7団体が大規模災害連携協定

AMDAは5月末から7月初めにかけて、岡山県内外の7団体と大規模災害時における連携協力協定を締結しました。被災者への緊急人道支援を円滑に進めるのが狙いです。

協定書に調印したのは、NPO法人航空医療研究所(大阪市) = 5月29日▽国立病院機構福山医療センター(福山市) = 5月30日▽備前市 = 5月31日▽和気町 = 7月4日▽岡山県看護協会 = 7月5日▽岡山市吉備学区連合町内会 = 7月6日▽学校法人川崎学園 = 7月6日です。

AMDAグループの菅波茂代表と各団体の代表者がそれぞれ協定書に署名、押印しました。菅波代表は「人財育成や国際交流を通じ、地域と国際社会に一層の貢献をしたい」と述べました。



5.29 航空医療研究所



5.30 福山医療センター



5.31 備前市



和気町・AMDA連携1



7.4 和気町



7.6 吉備学区



7.6 川崎学園

多くの方々からご寄付をいただきました。一部を紹介します。



岡山県熊本地震被災者救援の会様



MS&ADインシュアランスグループホールディングス株式会社様



黒住教本部様



株式会社ザグザグ様



岡山ネパールソサエティ様



紳チャリティライブ様